



水先生隨筆卷之十七



大槻文庫

○珠樹園漫筆

月洲新ト地園中有椎子一巨樹枝柯繁榮故今命園名玉樹者椎子樹名也

珠樹ハシヒシヒノキナリ實ヲ珠子トイフ泉州府志

ニ出ツ本草綱目喬木類ニ柯樹是也トイフ本州拾遺釋名

木奴集解珣曰按廣志云生廣南山谷波斯家用木爲船

舫兩船並也者也藏器白皮氣味主治ヲ舉クルノニニノ形状

ヲ詳ニセズ漳州府志木奴樹ノ名アリ其志ニハ形状

ヲ詳ニスルニヤ未タ見ズ即実ヲ柯子トイフサテハ

木ハ柯樹ナルニヤ又關書ニハ株樹科樹実ヲ株子推

子本邦ニシヒハ此字ヲ通用ス和名類聚欽椎子本草云椎子上音直追及垂和名之此按直追及スイナレハ



和訓。コレヨリキタル乎古未推ラシト稱スルハ此  
層ニ本ケルナルヘシ源氏推カモト又舊ク香推ノ宮ア  
リ○第云ノ愚考ヲ録ノ後白石ノ東雅ヲ圖スルニ或人  
ノ説ニ推ラシトイフハ其字ノ音ヲ轉メ此樹ノ名ヲシ  
イフ本朝國ノ始リ漢字ノ音ヲ轉メ此樹ノ名ヲシ  
井トイフベシト思ハレズシトハシハ下也トハ實也其  
實自ラ墜テ樹下ニアルヲイフニ似タリ古語ニ落推トイ  
ヒ推ラヒロフアドイヒシモ此義也日本紀萬葉集等ニ下  
ノ字讀ニテトイヒケリ推子シヒ舊事古事日本紀  
等ニ神武天皇東征シ初ニ推橋ノ末ヲサシ渡シテ御船ニ  
引テ入テスナハチ名ヲ賜リテ推根津彦ト名ツケタト見  
ヘタレトシトイフ義ハ不詳云々茂實日本書紀ニ就テ  
ヲ校スルニ○其年冬十月丁巳朔辛酉天皇親帥諸皇子  
舟師東征至速吸之門通證曰神代紀作速時有一漁人乘舟而至  
天皇招之因曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彦通證曰  
郡佐賀國下浦有地主神  
珍彦能為我導耶對曰尊之矣天皇勅授人推橋末以  
特賜名爲權根津彦此即直部始祖也史記トイフ又肘  
後方ニハ柯枝樹トアリ字書ヲ按スルニ集韻推朱  
惟切音佳木名似栗而小トアリシト定メントスレバ

甚疎漏ナリ雜字類編ニ推・推栗鉤栗ヲシヒノキトス鉤  
栗ハシラカシナリ推栗ノ名モ出處詳テラス  
小野蘭山ハ柯樹ヲシヒシヒノキトス泉州漳州二府志  
閩書等ノ説ニ因レルニヤ乃本邦産スル所ノ形状ヲ舉テ  
曰此樹山中ニ多シ大木ナリ葉ハ櫛葉ヨリ狭長ニ薄ク  
硬シ面深綠色背ハ褐色ニ老リアリ又濶葉ナル者大葉  
ナル者アリ一種サツシヒ云々共ニ冬ヲ經テ枯レズ推子  
ハ櫛子ヨリ小ニ外ニ粗皮アリテ全クコレヲ包ム櫛子ノ  
梳形大ナルニ異ナリ小兒炒リ食フ味良ナリ又形長キ者ア  
リサツシヒハ云々畧ス  
貝原翁大和本草曰推閩書ニ其樹ヲ科樹ト云泉州府  
志及興化府志按小野氏此ニモノ也ナリ本草ニハ無之  
ヲ按ニ貝原翁ハ柯樹ヲシヒト定メス上ニモイヘル如ク形状  
ヲ説クナケレバサモアルベシ小野氏ハ漳州府志ノ本



木樹ノ義不詳此樹枝柯繁多ナルモノタラシイテイフヲ柯ハ  
字音ニ枝柯也ト註シ又肘后方ニハ柯枝樹ノ名モアレハナリ  
未メ考フル所ナシ  
シトトハスイノ音ノ轉語ナリ筑前州香椎ヲカスイ  
トイヘリ日本ニ昔ヨリ椎ノ字ヲシトト訓ス神武天皇  
紀ニ辭曰ト訓ス音ヲ訓トセシ例多シ東雅ノ説ト併セ

又圓キアリ熟スレハ自落ツ山人其落タルヲヒロフ貧民  
ノ飢ヲ助ク山果ノ中ニテ其味且穀ニ近ク粟ニツケ  
リサレ性アシ、病人不可食塞氣傷脾損胃氣能發瘡  
疥無益于虛人  
丹岳野千里本朝食鑑曰椎子訓之比樹高數丈木理堅  
剛然易生性不作上材葉似榎木而薄小深青繁茂成叢  
春開小白花秋實採破實落狀如錐頭前ノ愚説ト暗合  
ス椎命名ノ原恐  
レシハコノ状ニ因紫褐色略類團栗而末尖焙焦去殼及扶  
皮采白仁可食白仁分作兩片味耳如菱實生用亦佳外  
殼易破去殼及扶食味似烏芋然不為上饌救荒尤宜古  
者為神供故

扶皮



本朝式神祇部有椎子五升此丹後伯耆貢獻之一種有短田如杏仁者出于多州莚屋城中其味最好故城守貢獻之一種有麻天波椎者似推而大過寸亦有生時可食炙食亦好俱不為佳乾則枯腐者多矣氣味發明說畧焉本說漢說ノ沙汰ニ及ズ單ニ和産ノ説ヲ舉クルノミ

いふやう

以上ハ中世下ニ文の強ク以下スと言キハ官長ナリ左ノ文書向ルハ何ノ贈ノ物ハ先を考へん以上ノ言書以て上ノと言すを此ノ考礼は以上ノ言書といふハ指シテ其ノ詳ナリハ其ノ中ニ見ルハ本邦中古といふハ正来ノ言書式といふんともいふ可い

○ 提仲西の高野子宮より奉祀を乞はる者我々

いふといふが知さ時亦水とキリ、考えたる片日す何の義、有る代知り、以和訓禁を見ぬ、いふ職人社新の流氷灌移を、物とらふと9代(一)片もみやこ、いふものあり、○流氷灌頂、産婦のこみ、流氷も、坐土、産所の穢物を江河に流す、水神を汚せり、是れ水神を汚るものありと認めらるる、追薦と名なる、非なる、河燕遊、見、神ある神農とする女といふ、いつき此教、つ子反ち也、仔細、齋、初、齋院春日、齋女といふ、古記に見、年估、女、宜といふもの、



夕の川流あり

五

いつ、五をよびたり局土此菊とりたり局土性  
して土の敷、五つを十敷の中をわけて五つは三つ、  
とりたり又十敷五をつつまるごと五つ、と切す祿  
く十はつと、いぢるあり

あらけ

菊名あり、附長崎の遊ひ一日土人の新五子  
一葉の形ありとをぬくは五葉ありは五葉といふ  
附やうり、アラクツタといふ五葉の葉いぬりし  
身は何と云ふの疑ひあり、土佐日記よりか  
海あらけ機にやうりあり、花さける云々

後、何うけ、海あり、ことあり、左車記、各退  
と何とありけ、ぬと訓、  
如此歌而闡明

書紀、散卒とあり、  
各此一所謂聚字鏡集云散以呂波字類抄云散アラシ

此二書、  
散卒アラシ散の字をあらくと訓、  
此二書は散の字をあらくと訓、

波あり、散の字をあらけ、  
波あり、散の字をあらけ、

左機、  
左機、

あつ、  
あつ、

物、  
物、

曾我、  
曾我、

三十、  
三十、

Copy  
○



夕は一体の賛あり 堅田彦子漢の粘聖伊川法不  
辛て換字せしめたり 賛の世に在る是君家一統の  
家形とす 頃谷文晷の集の所より 本館書篋を閲する  
は布袋奕戯の愚暢有り 是亦賛の一体禪師あり  
宗體在りくは後乃ういれり

博奕布袋

幾の世に在る 秋の夕に海の日  
百の時を多体 招實の字を流る  
一体十七

曾我蛇足不知其詳 越前州人世為武門性 好畫師周文畫  
山水人物花鳥筆力粗不似其師氣韻超絕非繩墨所拘也

翻譯名義集

姑蘇景德寺普潤大師

法雲

編

夫翻譯者謂翻梵天之語轉成漢地之言。言雖似別義則  
大同宋僧傳云如翻錦繡背面俱華但在右不同耳譯之  
言易也謂以所有易其所無故以此方之經而顯彼土之  
法同禮堂四方之語各有其官東方曰奇南曰象西方曰  
狄觀北方曰譯今通西言而云譯者蓋漢世多事北方而  
譯官兼善西語故摩騰法師始至後漢明帝而譯四十二  
章因稱譯也言名義者能詮曰名所以為義能詮之名胡  
梵音別自漢至隋皆指西域以為胡國云云宋紹興十三年  
衆香篇第三十四 羯布羅 此云龍腦香羯或作劫三  
藏傳云松身異葉萃果亦殊初采木濕未有香乾則煩理

Campēra,

Kamper,



aquer  
hoit.

折之中有香狀如雲母白如冰雪  
阿伽嚧或云亞揭嚧此云沉香華嚴云阿那婆達多池邊  
出沉水香名蓮華藏其香一圓如麻子大若以燒之香氣  
普薰閻浮提界異物誌云出日南國欲取當先斫樹壞著  
地積久外朽爛其心堅者置水則沉曰沉香其次在心白  
之間不甚精堅者置之水中不沉不浮與水平者名曰棧  
香

振貝羅 或寧貝羅或米之羅此云安息

瑠璃 或作琉此云青色寶亦翻不遠謂西域有山去波

羅奈城不遠山出此寶因以名焉應法師云加吠字或

毗字 吠瑠璃 或言毗頭梨 按 Nitram, glass

從山為名乃遠山寶也遠山吊須弥山也此寶青色一

吠瑠璃 翻云  
青色寶則  
瑠理也  
全我楚石中  
出不同水精  
磨琢所成也

○碧玉瑠璃  
琉璃和部白  
駒谷節用集  
流離漢唐

切寶皆不可壞亦非煙焰所能鎔鑄唯鬼神有通力者  
能破壞又言金翅鳥卵殼鬼神得之出賣與人或名絳

瑠璃釋名云絳含也青而含赤色也古字但作流離左

大冲吳都賦云致流離與珂瑛並寶後人方加其玉

按流離ハ毗頭ヲ上界セルノ名ニノヒトルナルニ

正字通曰瑠璃師古曰大秦出赤白黑黃青綠縹緗有十

種此自然之物今所用皆銷冶石汁加衆藥灌而為之茂

質按瑠璃自然物トイフハ水精石英ナルニ既ニ余瑠

璃鑑ニ詳ニス亦前説ト參考ス(唐山ニテヒイ

ト口ト硝子ト呼ルハ如何ナルハ硝石ノ硝ノ字ヲ以

テ命メタリト疑レシニ此正字通説ノ所銷冶石汁云

ニ考フレハヒイト口ノ硝ハ銷冶ノ銷ニメ其偏ヲ石ニ



Vitreus van glas, Vitreus, juun, veen,  
 Vitrium, glas, klaar, doorzigtig,  
 Vitro, helder,

○

从レ代(稱)セルニテ芒硝硝石ノ硝ニアラスト花明セリ  
 銷先彫切音霄  
 瑠璃漢書作流離梵語吠留离毗留离毗頭黎皆西洋稱  
 大ル所トリスルム Nitrum ナリ本邦ニテハ南蛮人ノ傳ヘタル  
 辞スキアマニリテビイトロトイフナリコレ身硝子ナリ  
 玉備ニ从ヒ瑠璃又琉璃トスルハ後ノ世ニ作レルニテ其  
 原トハ毗留离毗頭黎等ノ音譯字ナリ  
 釐等  
 レテグ也 正毫釐具百六十分ノ秤ヲ俗ニレテシク  
 イフ不審ニ思ヒシニコレノ釐等ナリ 物名曰今レテグ  
 ト俗ニイフハ唐音ノ謬リナル(シトナリ左モアリナレ  
 但コレハ釐タメトイフ小秤ノヲナル)

○

陰中強刺

昔大段ニテ無頼ノ者夫婦物イレノ激怒ノ餘リ其夫  
 昔妻女ノ陰中エ傍ニ在リ合フ醬油樽ノ栓ヲ押レコシ  
 タリ自ラアハテコレヲ抜ントスレト更ニ抜ケヌ却テ  
 深ク推シ入タリ暫クスル中腫痛甚クシ苦シミタリコレ  
 全ク醬油ノ塩氣滲ミワタリシト見エ日夜痛苦ニ堪ヘ  
 ス衆医種々ノ治療ヲ施セトモ腫脹甚クコレヲ抜クニ  
 由シナク只茫然トノ手ヲ束子タリ一機智ノ俗子アリ  
 コレヲ聞テ昔ニ一術アリ抜去リテ取セントイヘルニ託  
 セリ其人来リテ婦人ヲ四ツ造(ニナラセ)其後口ニ就  
 キカヲ極メテ臍臍ノ邊ヲ蹴ツケタリ其勢ニ挫向フ  
 ニ突奈ノ飛出タリ衆皆愕然其機智ヲ嘆稱セリト



往年故人中川陶宇詔レリ今茲六月廿一日 文政三年 庚辰

相川去潤来リ訪フ談次此事ニ及フ去潤亦コレト相  
似タルヲ詔ルコレ其術尤青中ナリ去潤嘗テ在京ノ  
中但馬城崎ノ人ノ詔ニ昔郷中ニ十四歳ノ處女アリ  
顔容色アリ渠恒ニ自テコレニ誇レリト故ニ人コレヲ  
惡クイ甚ニ或夜村中ノ惡少年ニ三輩申シ合セ彼女  
子ノ他ニ行クヲ待伏セシテコレヲ捕ヘ人里遠キ處ヘ  
挈リ往キ谷代ルコレニ戯レ其後ニ蔭中ニ蛸子ヲ  
釣ル釣ヲ押シコレニ其處ニ奔テ、散逃セリ其物ハ  
鱈ヲ釣ル大釣ノ如キモノヲ六七本モ竹ノサキニ懸  
テ以テ固ク卷キツケタル者ナリ釣ハ箭ニ曲テ先キ立  
ハ出ズ其形取りカラフモ此イフヘキ物ニ無慙ナルカナ

○ 其女此難ヲ受テ痛苦忍フヘカラスニカルニ人アリコレヲ  
見アタリテ其家ニ伴ヒ飯リ医ニ請フテコレカ治ラ託  
スルニ一人コレヲ出スノ術ヲ知ルモノナリ唯外ヨリ和  
痛ノ藥ヲ施セルヲミニテ日ヲ経タリ于時一俗者コ  
レヲ聞テ昔ニ一術アリ其周圍ニ施セル教釣ノ用キ圓  
形ト尊サハ徑リ何ニ程カアルヘシト尋ルニ因テ云コノ大  
サアルヘシト詔レリコレヲ聞テ乍チ其圓徑ノ生蘿蔔一  
塊頭ヲ取り其正中ニ鈎ヲ施ケタル竹ヲ貫通スヘキホ  
トニ孔ヲ穿チコレヲ微聲ソレヨリ蔭戸ニ就キ外ニアラフ  
レ出タル竹頭ニ其蘿蔔孔ヲ穿入手本トニ接ケ出タル所  
ヲ固ク把持ノ蘿蔔ヲ持ヒニ押シ入レ其鈎ノ蘿蔔ノ手  
面ニサシ入リタルト覺ヘタル所ニテ一氣ニ向テ正押シ入レ



多ニコレヲ引キ扱キタリコノ術ニ因テ鈎尖ヲ以テ内肉  
ヲシモ毀フヲナクノ右ノ如キ奇効ヲ得タリコトニ於  
テ衆人其妙智ヲ感嘆シタリト語リシトナリ世ニ斯ル  
器ヲ以テ如斯ノ惡業ヲ為スヘキ人亦アルヘシトモ覺ヘ  
ス惡事ナカラ人意ノ表ニ出タルヲナレト後聖ノ為メニ  
記シトハ嗟其人ノ奇術神授トヤイハンコレ亦誠ニ人  
意ノ表ニ出タルヲナリ

○朝鮮民間方

避暑 參葉 黃連 水煎  
防寒方 胡椒 生姜 蘿蔔 各等 為末以黑糖煉和為  
丸日服三丸 松崎惺堂傳

○岳飛

陳而戰兵法之常運用之妙存於一心

○海鷺 黃表 海語 嘉靖十五年撰。滿刺加物產

海鷺大如鳩春回巢古巖危壁葺壘乃白海菜也島夷伺  
其秋去以修竿接鏗取而鬻之謂之海鷺窩隨舶至廣貴  
家寔品珍之其價翔矣

○海龜

海龜鷹首鷹吻大者方徑丈餘春夏之交遊卵於沙際島  
遇而捕之下畧

○南蠻鉄トイフモノハ古来申ストナリ伊斯把你亞ノ國産

ト見ユ此國好鐵ヲ産ス故ニ都下ニ煨冶多ク且良工  
アリトヒブ子ルノセラガラヒニ出ツ天正慶長ノ頃彼國  
人數年秋西肥ニ来津ス國人コレヲ南蠻人ト稱ス道



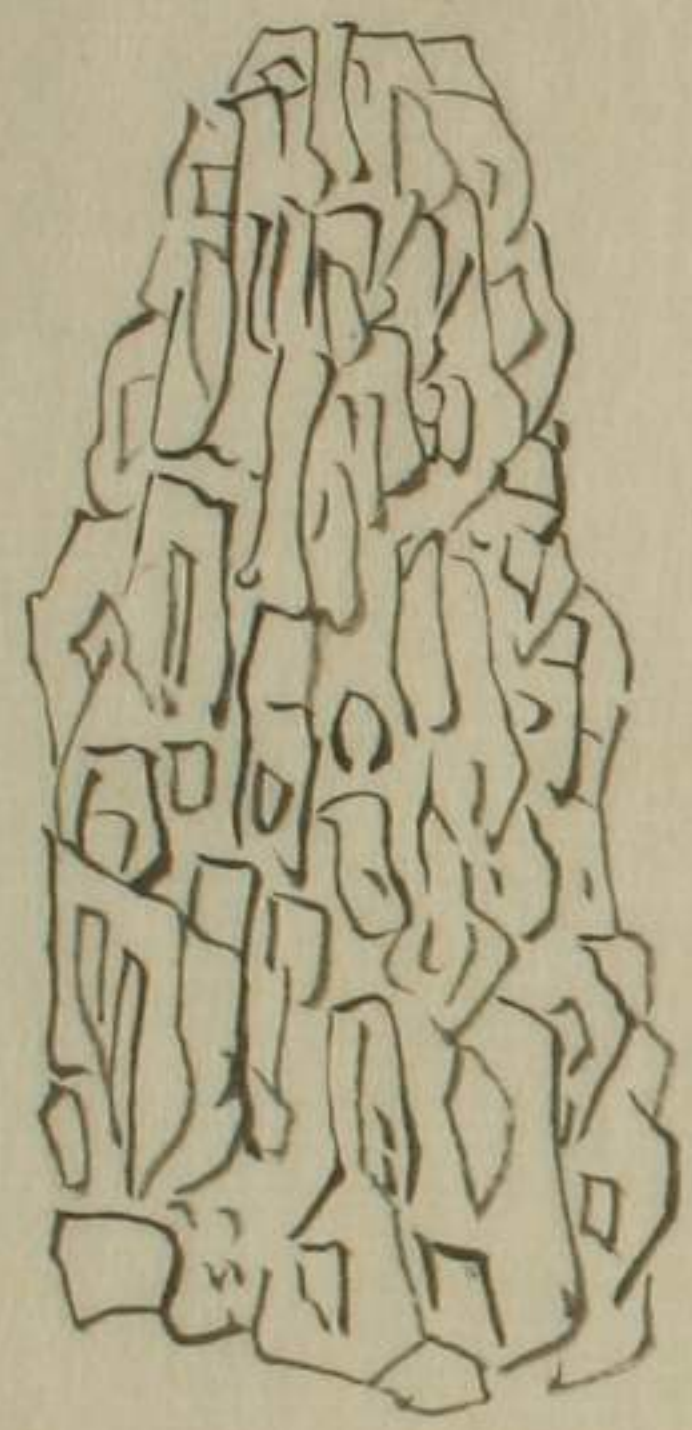
ヲ呂宋<sup>スル</sup>スレハナリト白石イハレキサレハ南蠻鉄ト  
 呼ヒモノハ伊斯把佈亞ノ産タルヲ疑ナシ又<sup>オレノ</sup>騰<sup>ハ</sup>樹子  
 油ヲホルトガルト呼ヒ做スハ波爾杜兒國ノ産ナリ  
 此國此樹ヲ夥ク産シ其油ヲ取りテ油ヲ絞リ夥ク四  
 方ニ貨ストコレ亦其國人天正慶長ノ頃伊斯把佈亞  
 ト共ニ西肥ニ来リタレハ其時此油ヲ持来リテ交易シタ  
 ル故油ノ名ヲ粘<sup>チ</sup>モズメ直<sup>チ</sup>ニ國名ヲ呼ヒシガ今ハ通粘ト  
 ナリシト見ユ又續隨子ヲモホルトガルトイフ地アリコ  
 レモ其國ヨリ種ヲ傳ヘシ故ニヤ

粘<sup>チ</sup>膠

冬青種類多シ其一種トリモチノキトイフモノアリシ  
 口ガ子モチノ葉ニ似テ色淺シ木皮ヲ搗テトリモチヲ

トリモチ<sup>ヒイラギ</sup>ノ條ニ粘<sup>チ</sup>膠トイフ鴻苞集ニ粘<sup>チ</sup>膠又粘<sup>チ</sup>ト  
 云フ シロガ子モチノ葉モチノキノ葉ヨリ潤メ微薄シ

○蟻封<sup>ミ</sup>ノ事<sup>ハ</sup>恙知<sup>ル</sup>此<sup>ハ</sup>丹洲民ノ写真<sup>ナリ</sup>也<sup>ト</sup>言<sup>フ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>恙<sup>ハ</sup>可<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>也<sup>ト</sup>  
 左<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>彫<sup>ル</sup>形<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>玉<sup>ノ</sup>封<sup>ル</sup>事<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>シ<sup>ト</sup>蟻<sup>ノ</sup>指<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>偽<sup>シ</sup>爲<sup>シ</sup>存<sup>ス</sup>  
 也<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>



其塔<sup>ノ</sup>青<sup>巧</sup>古<sup>木</sup>を  
彫<sup>ル</sup>後<sup>ノ</sup>形<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>  
 日<sup>位</sup>ノ古<sup>木</sup>ヲ寫<sup>シ</sup>テ  
彫<sup>ル</sup>形<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>

榑<sup>ノ</sup>形<sup>ト</sup>を造<sup>ル</sup>蟻<sup>ノ</sup>封<sup>ル</sup>形<sup>ト</sup>別<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>も<sup>多</sup>ク<sup>見</sup>ル<sup>事</sup>也<sup>ト</sup>粗<sup>シ</sup>義<sup>ハ</sup>也<sup>ト</sup>言<sup>フ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>三<sup>尺</sup>余<sup>也</sup>  
 造<sup>ル</sup>丹<sup>洲</sup>民<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>口<sup>ノ</sup>二<sup>尺</sup>余<sup>也</sup>三<sup>尺</sup>物<sup>也</sup>也<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>東



本氏写真備考 沁入吉野 下ノ地 其价 右指 左界  
因山推覧 至力 善外 御ノ中 跡ノ也

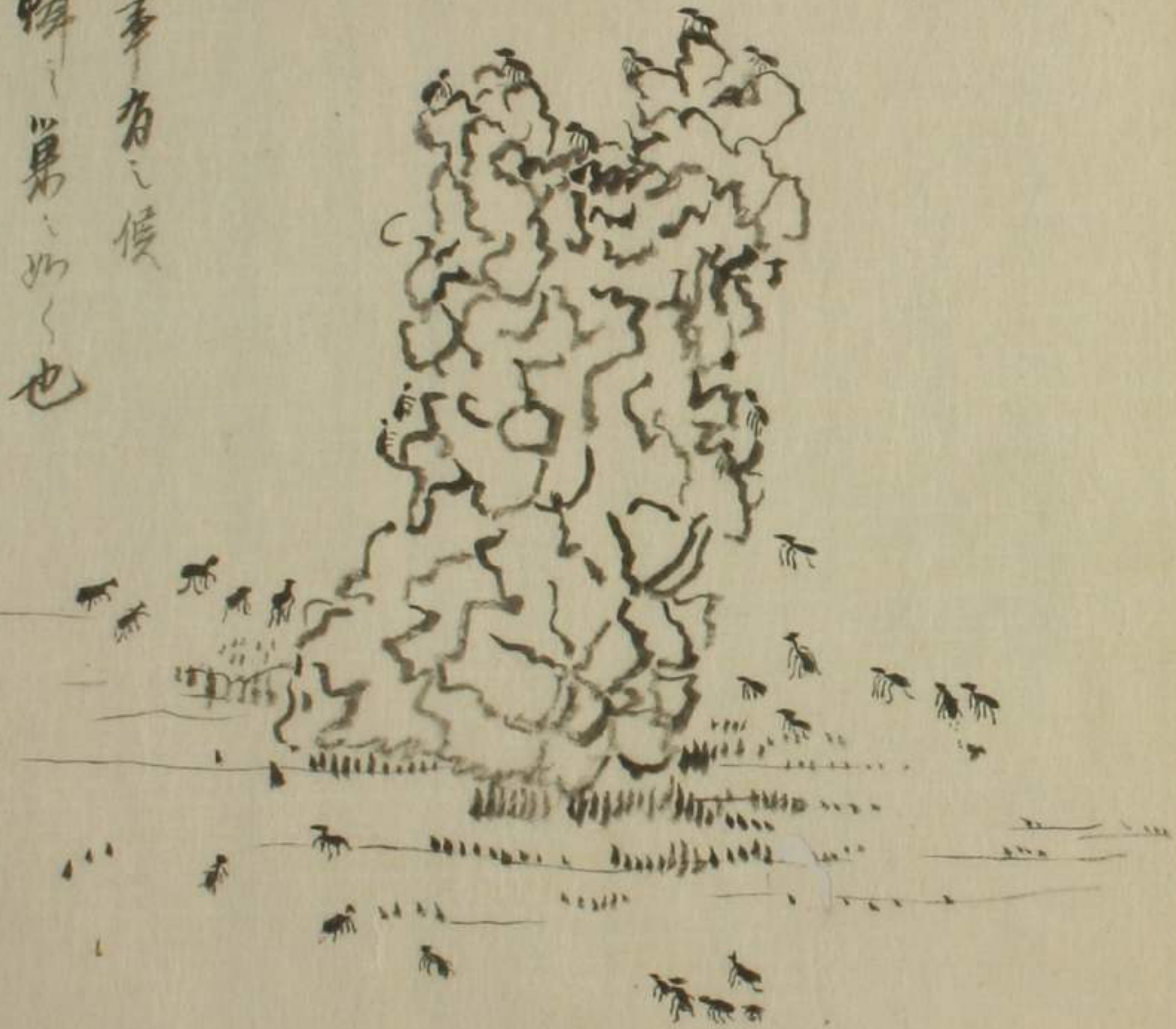
二月廿五日

文化七年九月丹波國冰上郡黒井村ノ農家ノ土籠ノ内ニ  
穀類ノ蟻蟻集ル蟻橋ヲナクサシ三尺六寸四ノ一尺五寸  
斗此家イノハナラズ山アリ其塔ノ奇巧彫刻セル如シ左  
木ヲ彫抜タル者也 栗本氏漫録廿八

文化七年九月

丹波國氷上郡黒井村ニ石土籠内ニ  
蟻土塔ヲ積ル繪圖面

其家ノ山事有之候  
右塔ノ容蟻ノ巢ノ如ク也  
但高十三尺六寸四ノ一尺五寸程





○ 委曇 羅句ニルラゴトナルヘシト梅塢イユリ  
翻成就 一切ノ事言文字ニヨリテ成就ノ義ナリ

○ 聞德 盲人カンノツヨキトイフハ聞ノ徳ナルベシ具足ノ人スラ  
眼根功德少耳根功德多ト梵經ニ託アリ楞嚴經ニ此  
方真教体清淨在音聞ト見ユサレハ佛中觀音大士ヲ  
崇メ梵經如是叙聞ヲ首トセリ鄭夾滌カ託ニ梵人長  
於音所得從聞入華人長於文所得從見入トイヘリ保己  
都檢校ナド尤其人タルベシ又託臆ノヨキ人ヲ地獄耳  
トイヘル早言モヘレハ必ス脱出セヌトイフヲナルヘシ  
聞ノ能ク入りテ留リタルナルベシ

○ 譯梵識有正翻ハゴ 義翻 銅鏡ニオミノカニ  
神籬ヒモロギ

○ 聞 フダリ 大秦牛祭文 ○ 難該當漢字

○ 安繕那 不空罽索經 般若三藏  
似銀鑕為莢 此翻眼菜 銀鑕也

○ 字 和蘭ニイフアンチモニナルヘシト梅塢イヘリ

○ 谷川淡齋云 あさな 字をよびたり交洛の義あり  
人交るす呼ぶ名あはれハナリ ○ 字を阿三那  
と譯セハ中山傳信録に見ル梵語は亞刹那と  
多俱舍論に見ル梵ハ文字のオミ ○ 學生入学の時  
文章院の堂監は書いテ存籍アリ何さむとあり  
トて儒者トる者の必す あさなつくといハる源氏の  
抄に見ルトイ後世の俗諺名とありイ一子守  
後拾遺にも見ルトイハる所の義ニよリ











臭トカケルト同シカルニ

○日光所社参り奉供事市人数言拾三万三千人

馬 三十貳万五千九百四十匹

人足 貳拾貳万八千三百六人

飯米 三百三万九千四百五十五石

右安永申年在調所往來九月

○局方発揮 元義烏 丹溪 朱震亨考脩 撰

○舍利別

或曰舍利別非諸湯之類乎。其香辛耳酸。殆有甚焉。何  
言論弗之及也。

予曰。謂之舍利別者。皆取時果之液。煎熬如錫而飲之。稠

之甚者。調以沸湯。南人因名之曰煎。味雖耳美。性非中和。

且如金櫻煎之縮小便。杏煎。楊梅煎。蒲桃煎。櫻桃煎之發  
胃火。積而至久。濕熱之禍。有不可勝言者。僅有桑椹煎。無  
毒可以解渴。其餘味之美者。並是嬉笑作罪。然乎否乎。

○鬼角

豈必あれりくもあれあれを己あれりくおれとちりめ  
いり親のあれ、あれ、家を鬼角と填めぬ。初め、  
たろりし其家、よりてをれ、り、をりくと通用するな  
り。文字填めたるより、ハ、意をたりやう、あり、や、  
すれ、バ、といりやりの、有、は、使、あり、相、使、方、有、。と、あ  
り、く、と、あ、り、辭、あり、何、と、い、り、切、り、と、い、り、や、う、の、時、使  
り、と、あ、り、中、に、け、り、を、り、考、何、成、り、。而、と、い、り、。と、あ、り、



中身より外の如き風味ありといふ事日多辭の旨だ  
りし、かく又通の肉より魂めまゝ土貢とありあり  
何の義たるより何知りをもやもしうめまありし  
中土貢といふ辭すかは鬼角とよみ出の昂より  
く何とありとよみしと思ひは元源の以對  
修第の修贖の中は何とあり思ひ鬼角あり修第  
之修第と書れし、とありとよみ思ひ相  
土貢、鬼角ありし、此れ、修第の直利ありと思ひ  
箱、本よりあれし、知りし、  
此よりし、  
のし、  
その書中、何との修第とあり、  
ける、  
見、  
と

謂れあるがごとし

○ 書經畢陶謨

皋陶曰都慎厥身脩思永云々  
皋陶曰都慎厥身脩思永云々  
云々何畏乎巧言令色私壬の條を益新助彦  
德廟、所侍講や上られしハ、厥身脩思永と云々  
私中、  
手短、  
の食、  
行、  
身、  
修、  
及、  
人の上







今一、聖人の孝と由油即ち如きものありしは巧言存  
色の人材風と用ひれし（も大向の害なるは是を氣  
をと思居し材を知り用ひ不材を知り不用し）  
と云ふは、  
肉、輕薄者ありしは風と材をたたまさしは用ひ  
し、國家を不し禍を中人材をいしは左を棄て巧  
い、  
色、  
西、  
ひ、  
こ、  
左、  
仕、

○

人の明智をさ（是を畏れ多し）  
中、  
策、

○

仙臺地、  
人、  
た、

○

江戸千駄谷彦根彦下屋鋪内樞の大樹  
根廻 大い男の土抱  
片枝 九間半餘  
物高 拾八間貳尺



































と見ゆ ○楳の草なるものありし湯ありし是考なり  
と記す 姑蘇をこいし西土の湯泉のこいし大和よりハ  
ありし山あり

○元を

毛人 朱書 蝦蟇 唐書 交易國 西山墨談 野作明  
人輿地図説 蝦狹 續日本紀 あひの園 日人日本  
の 同の美 元をより 日人人を指して志やれといふ  
沙門の者もや

○元をん

衣紋と書り 滿人 藻芥は上代ハ皆大塚衣をよて不  
くさ 帛フササノキヌ 今 毛を強く 不調多沙は 不  
及 各羽院の代より 強き時衣を 用 衣紋

の沙衣が来より 和訓 葉

仙臺表のりして 三由 衣袋を元をんと通称  
す い う あり 衣 や 知り も 田舎人ハ 粟袋入を 好  
く する て 包 ち あり き 治 ら ば 糸 あり め ん あり き 近世ハ  
名 れ も 見 ても 三 正 十 年 も 糸 や して ハ 田舎人 の 衣 ハ 紙  
入 あり ても 好 く き 包 あり ても 彼 大 將 衣 の 衣 あり ても  
ふ く する て 包 を こ する 衣 元 を んと い ひ は 紙 を た ら や  
或 云 者 ハ 強 く き 衣 を 元 を ん の 用 ハ 紙 入 を こ す ハ 紙 を  
た り て 元 を ん と い ひ ハ 紙 の 衣 あり や

○菓子

く ハ こ の こ 菓 を い へ 本 種 物 の 義 本 種 ハ 日 本 紀 に  
見 ゆ り 今 の 俗 菓 子 の 者 を 用 ひ て 餅 餅 の 類 を  
併 せ し て ハ 餅 餅 類 を 見 ゆ 又 糰 子 の 菓子 ハ 庭 訓 に











き第に内程にぬる多とこーう(百といふあるおき  
多新に造りたる多や古に在る脈調なるを  
こーう(たるといふ)の辞ある多やと既す以助  
ありはまよお世にたる物を彼にありうひてかく  
所し物いぬは源氏物語に攝すうをさくく  
人よをさありぬ助は主格くくを義と替せしむ  
よめするるとこーう(て多といふ)かく見ゆ  
さては片ツカ筋く知しをありゆるといふは同じ  
存すことありと思ひ互したる極白の製する  
の節義ありとの思ひたうゆとを解きまする  
て中辞と時味ゆるとこーうゆはゆるふを本義  
ゆて製白といふは通するに替義あり彼長崎

まをハ若より極白とはいハ玉造るといふど左  
ゆりしゆ知所極音存据也又插也と見ゆ和訓  
禁こーうゆ日記に招慰とけきこーう(慰諭  
とやをめこーう(とよめ)新撰家鏡に誦或諺と  
ゆゆいを知の義ありしラフゆ友ルあり源氏ゆ  
人よゆこーう(まひてと見(う)○今作は新の物  
と造るゆゆいゆ慰諭す)替ゆる詞あり(し極  
ノ字をよむゆ家の本義はありす極あると言る  
まゆハ刷食物まゆハ調茶物まゆハ製也あゆと  
見ゆゆゆ(製ゆ)

○

せしぬ

片ゆ世は俳優あどゆ相まゆいゆまゆといふを極系



と并（一）勢利 倭名林ニ多ク麗樂曲ありと云り此れ  
すし初（一）あるセリ（一）とて 返（一）の篳篥或（一）笛等（一）のフと呼  
白濁あり（一）愈（一）く曲常（一）ありと覺（一）ゆ  
めりや（一）す

○ 和訓禁（一）紅毛初（一）の（一）い（一）の（一）た（一）り（一）に（一）何（一）れ（一）産（一）種  
あり（一）ト（一）按（一）す  
○ 糞屎

くとも臭（一）あり（一）と 和訓禁（一）見（一）の（一）初（一）く（一）り（一）く（一）を（一）源（一）氏  
は（一）凡（一）の（一）若（一）手（一）の（一）よ（一）い（一）の（一）費（一）之（一）の（一）産（一）種（一）所（一）阿（一）古（一）原（一）と  
い（一）の（一）産（一）種（一）の（一）通（一）稱（一）と見（一）の（一）初（一）り（一）は（一）糞（一）す（一）の（一）よ（一）く（一）も（一）ハ  
臭（一）の（一）訓（一）あり（一）と（一）い（一）り（一）糞（一）す（一）の（一）物（一）とい（一） 乳臭（一）の（一）種  
とい（一）る（一）の（一）あり（一）と（一）い（一）や

○ 夫木集

本名扶桑集なり 倅りて偏（一）と冠（一）を取（一）て夫木集（一）と号（一）せり  
とと此撰集 歎名（一）の（一）ミ（一）と（一）ハ（一）鎮解（一）と（一）り（一）子（一）何（一）る（一）書（一）は  
可（一）く（一）亦（一）せ（一）と見（一）ゆ（一）始（一）て知（一）り（一）

○ つくぬか（一） 京都（一）の（一）部（一）

白髪（一）の（一）江（一）浦（一）茶（一）葉（一）似（一）る（一） 蓬（一）髪（一）と（一）○九十九（一）をつ（一）く（一）ぬ  
とよ（一）丸（一）の（一）百（一）も（一）せ（一）と（一）一（一）と（一）也（一）た（一）ら（一）ぬ（一）つく（一）ぬ（一）髪（一）とよ（一）丸（一）の

○ 尋（一）ふ（一）ゆ（一）り（一）古（一）樂（一）府（一）之（一）叟（一）の（一）詩（一）は（一）夜（一）飯（一）減（一）一（一）口（一）活（一）得（一）九  
十九（一）と見（一）ゆ（一） ○伊（一）勢（一）物（一）池（一）九十九（一）廻（一）の（一）る（一）古（一）事（一）記  
十（一）年（一）の（一）赤（一）猪（一）の（一）夢（一）高（一）似（一）たり 皆（一）是（一）古（一）（と）か（一）つ（一）る  
寓（一）言（一）あり（一）

○ さゆ（一）う（一）ぢ（一） せ（一）り（一）う（一）ぢ（一）



一謂張之一謂歛之再三呼不應必以醜聲右淮南子記論訓

諸生業柴野栗山曰諸生業須通古處今非讀書則不通古非游都邑周覽風俗山水則不能處今而知務

○京極黃門語

初教子師返か—應き教をせし師とすべし

○芭蕉の玉系

古人の跡を求めに古人の求めしを而を求めしと  
南山大師の尊匠又見(一)

李杜の酒を嘗め麩ゆの法術を啜白

○あ

祖翁初村  
季時門國家  
宗彦桃普  
芭蕉風羅  
天軒  
泊船堂  
釣月堂

徳州 高岡といふ所あり 國府邊のわらびあり 高岡の  
楓の天木あり ありの井ありの法ぎも—古跡を  
築きあつ—のありの井見れぬ ぬみありしを  
とみみん 多しかりと思ふ 然何の身—と

我れ我れありありの法ぎをし

ましといふ 初何の義ありや 知り法上 石山田郡  
桐生と大石と村あり— 其里人まきくま 其土地  
本垣ありし 田坂の下あり 坂を登れハきり 系村  
といふ ありまると 低きの間あり ありといふ あり  
田といふ ありあり あり— ありのあり— あり  
れあり あり— ありあり— ありのあり— ありあり  
ありあり— ありあり— ありあり— ありあり—







康熙百鳥圖卷所載鷓鴣

雌雄

蘆葦鳥

一名巧婦

一名桃虫

偶借一枝宿。飛鳴蘆葦中。方書稱巧婦。爾雅鳴桃虫。聲出吹噓韻。巢營毛毳工。賦推張壯武。傳雅緬遺風。

此鳥聲如吹噓。衣葦葦毛。毛為巢。大如雞卵。最為精密。

張廷玉漫題

コレレヨメルノメース第八種

ハールドニシ子チイ 一名ゲバールゲメース

エトラント 雪降亞ト第那瑪如弗力秒人イニチ

アハシセモス 印度雀ト名ノ林涅鳥斯此種ヲ詳記シ又

厄鐸尔都ノ書ニ其説ヲ載也又設色ノ写真ヲ収ム

其名ヲ呼テケレノ子アラウ ウ井イルト云此種エト

ランドニ止ラズアキリア國中エヌセクス及リン

コルニ等ノ凶水ノ沼池ノ畔ニアリ云々

桂家ニシノホルトヨリ贈ル所ノ全割ノモノアリ

全皮ヲ剝下シ換ヘヌスルニ物ヲ以テシ鉄線ヲ以

テ體翔ヲ固撐シ小架ニ止ラシメ眼ニハ皂色ノ硝子

ヲ嵌ス精緻ノ極ル所殆ンド活ナルモノト一般一小

簽ヲ附ス パリススロアルニモス 羅 メース 荷 其

形状云々 丹洲曰コレ小ムシクヒ及小ヨシキリノ類

ニノ百鳥圖卷ニ蘆葦鳥一名巧婦一名桃虫ト稱

ノ画クモノコレナルヘシ巧婦ハ昂鷓鴣ニノ古来ニソ

サ、イニ當テ来ルモノナリ今全割ノ物ト百鳥圖ト

ヲ見ルニ同一種ニモ云ソサバ、イニ非ス云々詳説アリ



桂嶼鶴鶴考ニ詳ナリ

○ヨジロベイ 江戸

ツリアヒ人形一名ニツクミ人形 京師ニテヤ  
ノスケ 伊豫ニテハリヤイ人形

花曆百詠ニコレラ是風珠ト名ク枇杷一核ノモノヲ  
用ヒテコノツリアヒ人形ノオモリトス 和方書ニ是ヲ

巴矣ト云フ利水ノ功アリトテ水腫ノ劑ニ配ニ用フ  
奇驗アリ 拵ヤ便所ノハリニスリニ枇杷実ヲ加ヘ用ル  
モ利水ノ効ニ取レルカ

○酒井讚岐守忠勝君詠事

樂ハミハハ新ハウハのハうちハのハあハれハや  
ナハあハれハのハあハれハをハすハるハ

○メンドウナ

白石紳書云メンドウナト云ハ平家物語の天まうかの  
義と因リく日と費する義歎むと云ゆズウナハ

猪俣あハはハ茂實曰奥州民間の秘ハの物ハの費ハといふ  
をハきハるハをハドウナハ何ハといハふハをハたハとハいハふハをハ

のゆハて粟ハを口ハつハり喰ハひハあハやあハやハ刀ハ用ハひハて  
あハきハし食ハのぬハ肉ハの皮ハの裏ハ面ハニハ五ハつハきハしハ海ハ白ハ丸ハを

物ハをハめハんハみハつハ又ハあハさハなハしハすハみハくハあハどハうハ海ハり  
あハるハあハんハどハいハドウナハ何ハといハふハ何ハの義ハいハふハとハ

をハ知ハりハなハ申ハ書ハの考ハへハのハぬハくハあハるハまハやハ片ハまハしハて  
思ハひハあハせハしハ終ハ年ハ家ハ物ハ移ハ考ハすハしハ

○あハんハまハよハりハエハゲハレハス



慶長元年上佐國桂濱浦戸の濱へエゲレス國の船漂流  
 して其の未だぬる人其船を黒くぬるるを見く  
 黒船と呼びし國主長官我部元親の船は兵卒を家  
 也漕船して彼黒船を見せしあるは船の長さ三十六  
 間換の房は廿二百惡風は播の折れ楫は碎け船前  
 舟の漕こま入り水は濁して死せる者三百人をり  
 己つり又安海なる者ふかんと真如常苦其交へる  
 五十余人其つむるのゆゑあゆむるは万端多し  
 大國より其人なるは救済を賜ひしは國の歸らし  
 め後々 大國記

○ 印度 應帝亞 印弟亞 ヒブ子ル ヒオガラヒイ  
 延柔 西の百尔西亞ニ起り北の大韃而韃ニ境ニ東ハ

支那ニ接し南ハ印度海 又榜葛刺ニ濱ス 東西九百四  
 十里南北一千百二十八里アリ云々  
 國治 莫卧兒ハ世ニ顯名アル一大富強國トス云々  
 中兵備常ニ騎二十萬其中五萬ヲ國帝ノ親衛トシ其  
 餘ヲ國中彼此ニ備フ其步兵ヲ併セ四十餘萬トス萬  
 治元年 千六百五十八年 格蘭帝ノ百尔西亞ニ敵スル騎二十  
 一萬二千歩八十六萬四千歩四萬ヲ出スト享保十三  
 年千七百廿八年百尔西亞ノ軍騎五萬歩八萬ニ當リ  
 歩六十五萬騎四萬象一千ヲ以テ不歩ハ四千人ヲ一  
 隊トス兵器ハ王城ノ武庫ニ藏メ他處ニ武庫ヲ置不  
 是ニ於テ戰ニ先テ甚々精驍ヲ有ス又大煩ヲ自由ニ  
 運旋スル術ヲ知ラズ軍陣及田獵ニ象ヲ用テ象一



頭ニ卒十人ヲ備フ海船ノ備ヲ設カルハ此國一大關  
車ニシテ是其國ノ海濱諸地ノ尽ク改還巴人ノ手ニ制  
セラル、所以ナリ

按ニ改羅巴洲中ノ人東方へ船ヲ通セシハ今ヨリ  
三百年前後ニシテ亞弗利加亞細亞沿岸ノ諸地印度  
地方ニ至リテハ其諸島ニテ漸ク侵掠ノ已レカ有  
トナレタリ元龜天正ノ頃ヨリ昔日本へモ船ヲ来  
レ交易ニ事ヨセ教法ヲ演へ終ニ侵掠ノ志アリト  
見ヘタリケレハ四散ニ放逐セラレシトナレリ元ト  
本説ニイヘルカ如ク海岸邊防ノ備ナキカ致ス所  
ナリ近時魯西亞人時々船ヲ来シ又其前後ヨリ葡  
厄利亞ノ形教艦ノ来往時々沿岸へ船ヲ寄ル等

○ 皆秋ヲ窺フニ似タリ秋沿海諸國預メ其防禦ナシニハ

○ アルヘカラサル所ナリ 甲申十二月録ス

○ オロヨウ 蝦夷方言

○ アツシヲ織成スルハ此樹皮ナリ 漢名榎

○ マダ 仙臺方言

○ コレ漉酒囊ニ造ル 漢名櫛麻

○ アカタム 南部方言 漢名朱苧

○ 初めろと

漢名 絨 天鵝絨 又剪絨 秋 邦子七あれを  
初めろと、この名、唐音の轉とは、中へも番名、  
轉聲、<sup>ハ</sup>や、多、<sup>ハ</sup>何れ、の、<sup>ハ</sup>あ、<sup>ハ</sup>り、<sup>ハ</sup>船、<sup>ハ</sup>来、<sup>ハ</sup>せ、<sup>ハ</sup>り、<sup>ハ</sup>や、<sup>ハ</sup>ら、<sup>ハ</sup>ぬ  
を、<sup>ハ</sup>お、<sup>ハ</sup>す、<sup>ハ</sup>あ、<sup>ハ</sup>の、<sup>ハ</sup>銅、<sup>ハ</sup>線、<sup>ハ</sup>を、<sup>ハ</sup>さ、<sup>ハ</sup>り、<sup>ハ</sup>て、<sup>ハ</sup>織、<sup>ハ</sup>る、<sup>ハ</sup>と、<sup>ハ</sup>い、<sup>ハ</sup>た、<sup>ハ</sup>毛、<sup>ハ</sup>の、<sup>ハ</sup>な、<sup>ハ</sup>り、<sup>ハ</sup>ぬ



之持(カトキリ)多細繩のひきつりまうしとほし  
系西陣(カトキリ)多細繩のひきつりまうしとほし  
蘭陀(カトキリ)多細繩のひきつりまうしとほし  
羅甸(カトキリ)多細繩のひきつりまうしとほし  
蘭のフリユエール多細繩のひきつりまうしとほし  
フリユエール多細繩のひきつりまうしとほし  
とあれりめき致

富士直高

富士直高三十五町五十三間三尺 并能勘解由測定

かこり 源氏夕歌

あんちりとしりてかんこりとしりて尻もみりて

限水(カトキリ)多細繩のひきつりまうしとほし  
上総 護多寶 鹿見島

船茹

ま(カトキリ)多細繩のひきつりまうしとほし  
船茹と着し又紡績して布織也

天 貞 四年甲子二月廿日 鉢山林  
大寺 鉢山文北軒本 土鉢山本 鉢山  
蓮筆 一合人 金五千八百八十口 鉢山

右天復古鐘現存豊前宇佐神祠按天復唐昭宗年號



其甲子歲實秋延喜四年距今千餘年可謂希世古物也意韓人所獻乎但其銘文艱澁加以漫滅而不可讀是為憾耳乙亥秋余西遊親見其鐘感賞之餘即手搨一本而歸今茲遂模刻之以贈同志云

文政七年歲次甲申正月

山崎美成識

○長崎集覽 二十卷

松浦桃溪撰

長崎雜誌

香月椿山撰

○鬼門

鬼門ハ神異經ニ東北ノ方皇星ノ石室アリ顯曰鬼門史記注ニハ海外經ヲ引テ曰東海ノ中ノ山度常ト云

山ニ桃樹アリ東北ニ門アリ曰鬼門万鬼ノ聚ル所鬱壘トイフ神万鬼ヲ主ル人ヲ害スレハ縛メ虎ニシラハシムト云此説ヲ以テ見レバ人鬼門ヲイハク口ニナシ丑寅ノ角ハ日輪ノ始テ地下ヲ離ル一方角ナリツレ故尊怒テ諸事ヲ行セズ日ノ地上ニ出ルハ寅卯辰ノ三方ナリ春分秋分ニテ論ス二分ニハ東方ノ卯ニ出ス先地下ヲ離ルハ東北ノ隅丑寅ノ間也故丑寅ノ間ヲイハクヨシコレ實ノ鬼門ニテハナシ鬼門ト云ハ子丑ノ門也東北ノ角ヲ鬼門ト云ハ誤ナラシ蕭吉五行大義卷ノ二ニ陽ハ甲子ニ生メ戌亥ニ足メ戌亥ヲ天門トス陰ハ甲午ニ生メ辰巳ニ足メ辰巳爲地戶陽ハ甲寅ニ界フテ子丑ニ足ラス仍テ子丑爲



鬼門陰ハ甲申ニ界フテ午未ニ足ラズ午未為人門此  
並ニ六甲ノ空支ナリ言ハ甲子ヨリ始テ十干ト十二  
支トヲ合スレハ甲子乙丑丙寅丁卯戊辰己巳庚午辛未  
壬申癸酉ニテ十干ハ終リ戊亥ノ二支ニ十干冠スハ  
キナニ故成亥ヲ天門トス余ハ倣之

蘭畹摘芳曰楊升庵全集引太平寰宇記曰不灰木俗多  
爲鋌子燒之成炭而不灰出膠州予親見之其葉如蒲草  
束以爲燔謂之萬年火把火浣布出蜀建昌其白如雪出  
於石障元史所謂石絨也二物不同博物君子宜知之余  
由諸說考之知是漢土所亡而西土人所齎來也云元  
史石絨及建昌所產者蓋石麻之類膠州所出不灰木者  
亦火木之一種也已

增廣書及蘭化翁火浣布譯說所載石麻者與石綿異昔  
邦石綿者橫紋而堅理固非可梳者也石麻即石麻蓋橫  
理耳否則不充于事實矣

貞山公 永祿十年丁卯三月十一日誕生稱梵天九母  
君最上出羽守義守之女天正六年以寅正月十一日  
於羽州并澤下永井西城初冠號政宗任後三位權  
中納言寬永十三年五月廿四日七十歲逝去

義山公 慶長四年己亥誕生稱虎菊丸母君田村大膳  
大夫清顯之女也同十五年庚戌加冠元和九年任後  
四位侍從越前守又任左少將陸奥守萬治元年以  
七月十二日六十歲逝去御諱忠宗公







三善朝臣等、政所寄人ナリ肥前守ハ飯尾和泉守ハ  
清和泉守貞秀丹後前司未考歎身ハ病勢ナリ煩トイフイ  
ハ道常通テ斯クイフ堂上ノ風俗ナリ  
去秋田中氏コレヲ茂實ニ示メ考證ヲ請フ然比コ  
レ元ト茂實力輩ノ釋セサル所故ニ私ク好古ノ  
諸子ニ謀リコレヲ實問スルコト己ニ一年遂ニ尤ノ略  
考ヲ述メ以テ其需ニ應ス  
乙亥復 磐水 平茂實

○第四十二代 文武天皇三年夏五月  
丁丑流役君小角于伊豆島  
紀曰丁丑役君小角流于伊豆島初小角住於葛木山  
以咒術稱外位下韓國連廣足師焉後害其能讒

以妖惑故配遠處世相傳云小角能役使鬼神汲水採  
薪若不用命即以咒縛之  
扶桑略記曰役優婆塞賀茂役公氏今高賀茂朝臣也  
大和國葛木上郡茅原村人自姓博學仰信三寶齒及  
二毛更居巖窟住葛木山三十餘箇年被葛餌松葉以  
之為業開孔雀神咒窮奇異驗術乘五色雲通仙人  
驅使鬼神汲水採薪仰山神稱大和國金峯山與葛木  
巖立互石橋可通行路爰鬼神等夜夜連巖削調度殆  
矣役行者追云白晝露形可互石橋然葛城峯一言主  
神愧其醜形不用其命因茲行者以咒縛之置于谷底  
彼神託宣宦臣云僕元鎮守諱殺之徒茲役君小角將  
傾國家先以繫縛天皇丁勅召役行者昇空飛行不能



輒捕窺掘其母小角自來仍配伊豆大島歷三箇年晝  
隨皇命居伊豆嶋衣爲練行行富士山身浮海上走猶  
踏陸遠馳震旦龍如翥風○役公傳云大寶元年放  
上京師嘗在櫻井箕面山山有龍建寺箕面寺是也小  
角自坐草屋載母於針江海入唐○漢按神社啓蒙曰  
諺云昔役小角集衆神於葛城金峯間架石橋其以不  
早成而小角怒咒一言主縛繫之深谷云云蓋小角葛  
城里民而一言主天神裔胤也何爲其然乎○寺嶋氏  
曰按秦始皇帝在海神架石橋怒不早成縛海神後人  
誇行者靈異附會之妄說也小角不唯佛道崇神道殊  
生於當郡而一言主郡中之靈神也可考合然元亨釋  
書歌林良材集用俗說遂爲常談矣小角及赤澄驅使

鬼神者疑是土鬼前鬼之類却溪澗走嶮岨山人死然  
抑鬼神者乎小角之配流者因韓國連之說也雖修孔  
雀明王咒何能有縛無形神乎實有縛一言主天神奏  
之何以說乎是解疑之一也

干支

律歷志大撓承黃帝之命占斗魁所建始作甲乙以名日  
謂之干作子丑以名月謂之支支干相配以成六旬即六  
十花甲子也支干即枝幹干也屬陽故曰天干支枝葉  
也屬陰故曰地支干有十甲萬物甲拆而出也乙萬物初  
生屈曲而未伸也丙萬物炳發著見也丁萬物壯實之形  
也戊茂也言萬物之茂盛也己紀也言萬物有形可紀也  
庚堅強貌言萬物堅強而收斂也辛言萬物方盛而見制



也。壬。妊也。言陰陽交物而懷妊也。亥者。言在時水土既平。萬物可揆度也。亥有十二子。亥也。陽氣始萌。孳生於下也。丑。紐也。寒氣屈曲而尚紐也。寅。胎也。陽氣欲出。陰尚強而胎。寅。胎也。卯。者。冒也。萬物冒地而出也。辰。伸也。萬物皆舒伸而出也。巳。巳也。萬物畢布而已盡也。午。作也。陰陽交相愕而作也。未。昧也。日中則昃。而陽向幽昧也。申。申東也。萬物申束以成體也。酉。就也。萬物熟而成就也。戌。成也。萬物將成息也。亥。核也。萬物堅核而收藏也。

○

ワリテルフレイス 見水畏怖

風犬咬ノ老水ヲ見テ畏怖シ内毒跳動スル者、不治トス和蘭ワリテルフレイスト名ツク犬咬老候中ニ

コレヲ説ケルモノ多シ東方犬咬諸症ニ未タ曾テ聞見セズ但癩病見水発動スルモノ多シ相似スルトニテコレトハ固ヨリ別因ナルベシ録ノ識者ノ經驗ヲ問フ

行餘醫言 癩癩

俗又云見水而発見火而発見稠人躁衆而発者間亦有之非必皆然蓋水之流動火之發烈衆人之熱鬧癩人一見其躁擾之狀怯心惶氣驚駭畏怖跳動内氣發爲之衝逆而発耳

按ニ癩人ノ水火流動發烈等ノ躁擾ヲ見テ怯心畏怖ノ内氣ヲ跳動スルニ因テ発スルハ其理當サニ發ルヘシ犬咬病人獨リ水ノ流動ヲ畏怖ノ内毒ヲ発現ノ故ノ可ラサルノ死者ノ皮ヲ爲ストイフハ未タ



其理之辨究之方夕之請之為之真理ヲ説テ示也

甲申初春書

磐石翁

○五月十九日宿桑折驛是日行程八里熱行勞頓甚驛隸伊達郡聞松前田沼主花三侯邑皆在此左右又有隸白河隸高田者一村分屬步武易主政令寬猛各從其君風俗亂莫或禁止甚則至殺人西隣避仇東家以其異主民情不知懼吏不得逮捕信如所聞何用守土者為哉書以寄一慨大氏自下毛至仙道土荒人少俗多不舉子其民二男一女聘妻不易凡驛有逆旅處必置娼其無事者就睡焉一夕之驪率捐旬月之糧土荒人大賣田宅不售少間輒棄往四方是以荒田廢宅所到相望率行天下願留以民瘼凡中國萬石之地以萬口為率剗山逼水無地

不關人重矣其土是間萬石僅三千口哀大處又減三石之一俗吏庸陋無深識以溺子為舊俗以置娼為富其土可憫也

右懽堂松崎復游東阪錄卷上 文政元年戊寅

五月廿七日早起渡磐井川半里松山目驛訪磐井郡正大概汝鄉清臣子繩之兄也於老友玄澤翁為族孫翁之次子士廣清崇汝鄉壻佐水中澤知考先在同飯與汝鄉及二生同游五串溪在西上二里其水少栗駒山東行十里至此兩峽側立萬石東之水勢奔激臨危則瀑下潭滄泳洄則潭潭色紺碧行石間一止一激小半里始曠為磐井水東流與北上川合玄澤翁歸磐水取於此又



化初。汝獮架飛橋。旋中。以度人。結構特巧。橋以上石壁直  
竦。如倚萬笏。人不可行。橋以下。峻增奇詭。如層臺。如臺嶂。  
如屋如象。水流其間。潭。相接。方者圓者長而指者。屈律  
者。皆從石勢。以成坎止之形。人行石上。始能盡其妙。措步  
極難。或捫壁。或據巔。蝟行。鱗步。蛙躍。而過。南崖。巔絕。十餘  
仞。上架一閣。布汝獮所造。地屬指固村。渡橋左折。十餘步。  
坐巖以眺。五串之奇。在昔一瞬。其曰五串者。上下五瀑。如  
串珠然也。時天旱水縮。所見不如教。兩過漳。盛。激怒。旁衝  
崖止。五串而已。或曰巖石。邦語與五串相近。故也。置  
酒里正家。以賞餘興。瀑下獲鱗。作鱗甚美。可儷龍崎之闕  
以下畧

布松崎憶堂游東阪錄卷下

磐水先生隨筆卷之十八

○珠樹園日涉

吳江徐靈胎洄溪醫學源流論瘍科論曰。瘍科之法。全在  
外治。其手法必有傳授。凡形色以知吉凶。及先後施治。  
皆有成法。必讀書。臨症二者皆到。然後無誤。其升降圍點  
去腐生肌。呼膿止血。膏塗洗熱等方。皆必純正。和平。屢驗  
者。乃能應手而愈。至于內服之方。護心托毒。化膿長肉。亦  
有真傳。非尋常經方所能奏效也。惟煎方。則必視其人。必  
強弱陰陽。而為加減。此則必通乎內科之理。全在學問。根  
柢。然又與內科不同。蓋煎方之道相同。而其藥則有某毒  
主某藥。某毒主某方。非此不效。亦別有傳授。故外科總



以傳授為主。徒恃學問之宏博無益也。有傳授則較之內科爲尤易。惟外科而兼內科之志。或其人本有宿疾。或患外症之時。復感他氣。或因外症重極。內傷藏府。則不得不兼內科之法治之。此必平日講于內科之道。而通其理。然後能兩全而無失。若不能治其內症。則并外症亦不可救。此則全在學問深博矣。若爲外科者。不能兼。則當別請名理內科爲之定方。而爲外科者。參議于其間。使其藥與外症無害。而後斟酌施治。則無後有所益。若其所現內症。本因外症而生。如痛極而昏。暈膿欲成。而生寒熱。毒內陷而脹滿。此則內症皆因外症而生。只治其外症而內症已愈。此又不必商之內科也。但其道甚微。其方甚衆。亦非淺學者所能知也。故外科之道。淺言之則惟託煎方。教首合

膏圍藥幾科。已可以自名一家。若深言之。則經絡藏府。氣血骨脈之理。及奇病怪疾。千態萬狀。無不盡識。其方亦無病不全。其珍奇貴重難得之藥。亦無所不備。雖遇極奇極險之症。亦了然無疑。此則較之內科爲更難。故外科之等級高下懸殊。而人之能識其高下者。亦不易也。

○池田三左衛門尉輝政

慶長十八年八月廿五日於播州姬路死五十一歲

本多中務太輔忠勝

慶長十五年十月十八日死六十三歲

加藤肥後守清直

慶長十二年六月廿四日死五十一歲







花押菽

水城實錄

同过隆撰

視聽日錄

都史文集

洪武正韻

田村九事跡考

成憲摘要

歷代大臣考

記錄年代考

日次記考證

新撰史集 目錄附

草露貫珠

常陸國誌

家乘日錄

六國史

惺窩文集

南朝事跡

楠記事

新撰年中行事

月朔初任

諸記年月考

慎終日錄

同詩集 附錄目錄附

沈張蔣詩文 筆讀附

霞池省菴手簡

和漢松梅百題

萬葉類句

山次日記

近代諸士傳畧

諸國土宜備考

南行雜錄

金澤嘉餘我編

雜錄

致祭儀節

瑞菴墓誌墓

張非文筆讀

還菴詩稿

同採錄

萬葉目安

新撰近代帝系

甲寅紀行

西行雜錄

續南行雜錄

和蘭譯語

書法纂要

泰鮮筆誌

禮樂疏釋奠儀



啓聖公祠祀

釋奠儀諺解

改定儀註諺解

祠堂時祭諺解

墓祭諺解

朱子註釋

文苑雜纂

一西山公序一代中あそん 小序祐又ちうひり序  
秀とゆ 師遊者の後 細條石序あつめ都合三十

巻の書とあそんれい

常山詠草

常山文集 二十五巻

常山詠草 五巻

人生七十在来稀

杜少陵曲江二首其二

朝回日典春衣每日江頭盡醉歸酒債尋常行處有人  
生七十在来稀身花映蝶深見點水晴蜓疑飛傳語

風光共流轉暫時相賞莫相違

杜律七言集解

ケレフル

日本渡来元鑑三年あり元亨銀元鑑八年乙亥ニ始ル  
ケレフルハ所謂タイル 権銀ハ古銀也 榎園

好

方俗唐山人の口まぬを考するハア〜といハ古通  
ハア〜といハの類訛あるナシ

禪

肥後もそふと〜をへごといハ長崎も〜ハべことハ  
土俗も〜ハふこめといハと和訓類聚見〜ハ茂實  
ハ長崎も〜ハごといハ〜ハ關東も〜ハ  
〜ハあきまの類也〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ



ごし河ありて川れあどいり又人河ありさぬ  
罵り初る魚あたれめといりあり解りぬし  
又あれ九世初る娘ごしりて昂ち魚あがたれ下  
かりぬといりありや娘ごしり義いさし考へ  
泊す合流常用の禪根下帯テ、テと訓あたり  
禪根續鼻禪をフドシと訓ちり魚こいどしの辞  
義未し考へ泊す

○ 足袋

單皮ナリ和名秋野人以鹿皮為羊靴名曰多鼻あり  
くちをたびと唱へ来りしと解り泊す

○ 正名緒言 上下

天明戊申十一月 国山 菱實大觀著

○ 申次

仙臺ニ御申次ト云爵アリ名披露ノ役昂奏者ナリコ  
レハ鹿苑分ノ頃士人ノ爵ヲ制メ十一級ト為ス一日  
公族ニ曰大名三日守護四曰外様五曰評定衆六曰御  
供衆七日申次昂コレ八曰番方九曰國人十曰奉行十  
一日末士

○ 檢断

驛中ニ馬継處ノ主役所謂問屋役人ヲ仙臺封内ニテ  
斯ノ稱スコレ北條氏之制置探題檢断二等以各地之  
事東儀奉行檢断則舊矣云コレヨリ出タル檢断ナル  
ベシ

○ 譜第



○ 本謂譜系轉為累世之義至武士則莫不屬源平二氏者其子孫皆稱譜第今或作譜代謬矣

○ 侍

侍稱在古甚重弘安祀節載

後宇多帝詔曰五位六位等下北面依稱侍今呼僕隸為侍則濫甚

○ 家督

越世家云家有長子曰家督今謂龍祿為家督蓋義之轉也仙臺ニテハ今ニ於テ惣領ヲ家督ト稱ス龍祿ノ後ニ稱スル名ニハ用ヒス古義ヲ失ハストイフベシ

○ 線蘿蔔

蘿蔔ヲ線ニヒキテ汁ノニニスルモノヲセシメロツボト

イフヘ何ニノトニヤト疑ヒタリシカ線蘿蔔ノ唐音ナリト始テ曉レリ

○ 音譜聲等

フシシリシタメ共ニ華音ノ轉ナリ按本朝中古籠樹浮屠因挾朝旨以募建堂塔音譜之名蓋起于此後來不問緇素通為工作之目也

○ 家來

補關白家司別當者謂之家禮見職原家禮出處云々以今觀之禮一轉為賴又轉為來愈轉愈遠

○ 役 席 格

江都所謂役者 天朝職也所謂席者位也所謂格者爵也



○國

南留別志曰邦言所謂孤睡者郡也摸之方音轉睡古所謂國名百四十有四何大多也是其為郡斷可見後之博士嫌其名之似小易以國字而不知填州字之為正當矣

○十帝 五帝

平景時之子長曰源大景季次曰平次景高曾秋祐成兄也而呼十帝時致弟也而呼五帝人或疑之余嘗聞之先輩曰中葉以來武人之子初著烏帽謂之元服猶謂紳一長者必為之義父謂之烏帽謂之元服倉公寵景季加首服于殿中因賜源氏蓋公為之義父也十帝從母為祐信所養准九帝祐國弟五帝方加首服為此條時政義子因受偏名曰時致而准十四帝義時弟此

○說始發蒙

醫院

候醫與醫者

直醫番醫者

醫員德醫者

瘍醫外科

藩國

診醫 點醫

內醫與附

其他同前

筆

ふんじ筆といふ和名鉄のふんじといふ也又ふんじといふは筆の音也述事而書之也蜀一楚一吳一秦謂之筆古今注在之筆不論以竹以木但能染字成字即謂之筆耳以枯木為管鹿毛為柱筆毛為被所謂蒼毫也彤管亦流耳史官用之

○翰







鸚鵡一隻在堂前架上洎殺崇義之後其妻却令童僕四散尋覓其夫遂往府陳詞言其夫不敵竊慮為人所害府縣官吏日夜捕賊涉疑之人及童僕輩經拷捶者百數人莫究其弊後來縣官等再詣崇義家檢校其架上鸚鵡忽然聲出縣官遂取於臂上因問其故鸚鵡曰殺家主者劉氏李弇也官吏等遂執縛劉氏及捕李弇下獄備招情款府尹具事案奏聞明皇歎訝久之其劉氏李弇依刑處死封鸚鵡為綠衣使者付後宮養餼

鸚鵡の事友を告訴する由ありといふ事なり天網恢恢物さしといハリありありなり私通のためなり不業をある君親の法を破る事なり西國情はるに於てハ夫れあり其情愛を絶つ事なり至

此の事深く嘆息するも堪へずいかに此は形も沈溺するもよや嗟嘆悲憤を於てハ枉りたるともさるるも一種の心性を變化するものとは見ゆるなり今れも私通とも又人情の善惡同一般なること嗟嘆するもさあらずなり抄録せり

○ 小田原外郎上りの茶のたのちりありありなり

透頂香丸

孩児茶 茶芽 若四錢 白蓮蕊 一錢半 煎香 五分

檀香 一錢四分 耳草膏子丸 弦響居連生八股毫十三

○ 役小角 元亨釋昏 濟北沙門 師鍊撰 治東北丘 惠空和解

賀茂ノ役公氏ニテ今ノ高加茂ト云モノナリ和州葛木

ノ上郡赤原村ノ人ナリオヨリ惜リ敏ク學ブ一博フ兼



テ佛乘ヲ締メリ然ルニ年三十二ニシテ家ヲ棄テ葛木  
 山ニ入り巖窟ニ居ル一三十餘歲藤葛ヲ衣トシ松果  
 ヲ食ニ充テレタリサレハ孔雀明王咒ヲ持チ五色ノ雲ニ  
 駕リツ、仙府ニ優遊シ鬼神ヲ驅リ逐レテ使令トス凡  
 日域ノ靈区ヲ修行偏歴シテ殆ント至ラスト云所ナシ  
 三 第四十二代文武 今山伏修驗道ノ輩役氏トイフ  
 ハ役公氏福善院役行者、役ト見タリ茂實カ母ナリケル人ハ役  
 氏福善院茂實行ノ女ナレハ小角ノ傳ヲ圖ノ略フニ抄録  
 不祖祖父素行ハ東奥磨澤郡水澤トイフ地ニ住スル修驗ト  
 控コ控リ嚙カ嚙ル 兄ト兄ト威カ威ル光カ光ル院ト院ト素ト素ト融ト融トトイハトイハリ

西域圖見録ニ魯西亞ノ西北ニ隣リ最大國ニテ口シア  
 ニ朝貢臣事セシ程ノ一シカモ乾隆年間年々令戰ホモ

アリシトナカテ西洋地志地圖中ニ一向書キ載セサルハ  
 如何ニヤ或圖見録誤聞ノ一ハヲ記シタルヤト知ラル山村  
 昌永カ考ニモ清朝ニ投誠ノ土尔扈特ノ傳飭ノ辞ナ  
 ラシカ何レ誤聞ナラレトハイ一リ

○ 喀カ喀ル 古ノ漠北ノ地秦漢ノ時ニハ匈奴ノ地トセシ由其後嚙  
 突厥回紇ナト或ハ興リ或廢シタル一清一統志ニ見ユ

○ 圖ツ伯ツ特 西呼チベツト

古ノ西南邊外諸蕃ノ地ニテ後吐蕃ト号シ元ノ時烏思  
 藏ヲ置シ今西藏衛藏ナト、稱スル地ナリ衛藏圖識ニ詳  
 ナリ

○ 加カ模モ沙シャ都ド加カト卧見狼德トノ海路問



○ 答カムサーツカトブルートレドトハ方角大ニ隔ル其  
間ノ海ノ一北アメリカ未審地北海ノ義ナリマコレハ近  
頃諸厄利亞人僅ニ見聞キタルマデニテ于今全ク訪得セ  
シモノハコレナキ由亞細亞ノ逸北氷海ヘカ、リ舟行致  
スニ夏時ハ航海ナレヨレナリ

○ 鯨鯢 アイギヤウ

○ 鮎 西由古俗本朝食鑑ニ出ツ長州ニテ千アユヲアイ

○ ギヤウト呼フ

○ 空都悉

○ 蝦夷人樹ヲオロヨウト呼ヒ衣ニ織ルモノヲアツシト  
イフ曠園雜誌曰騰越州外行四日為野人國國人以蔑  
為衣以老樹皮厚而柔者為褥名木皮褥

○ 按野人或作衣人又野作野素白石日即蝦夷也土人  
今尚以木皮織衣謂之アツシ

○ ニダ 奥羽方言

○ 此樹皮ヲ采テ粗布ヲ織リ酒ヲ絞ル袋ト作スモノアリ  
カヅキ

○ 今蒙衣をカヅキと稱す（きぬうづ）花といふ是あり  
蒙衣（カヅキ）左傳（見也）婦人（門）を（カ）ぬ（ハ）面（を）を（カ）ぬ（カ）の  
布（文）あり（あり）の（人）人（見）え（也）疏（陸）日（カ）の  
製（物）物（カ）○カヅキ被ノ家制（カ）檢（査）遺（集）  
二時雨（カ）カヅキ（カ）杖（カ）カヅキ（カ）上（カ）又（カ）着（カ）也（和訓）  
見也

○ 京都の女人カヅキ（カ）蒙衣（カ）歩（カ）行（カ）す人（カ）の（見）知（カ）の（所）あり











